

モーツァルト／ピアノ協奏曲第23番 イ長調 K.488

1786年3月2日にウィーンで完成された第23番のピアノ協奏曲は、作曲の状況が詳らかにはなっていない。自筆譜の紙の調査からはかなり以前に使っていたものも混じっていることがわかり、そのプロセスが判然としないほか、初演も完成年の3月から4月にかけて行われた予約演奏会のどれかで行われたのだろうという程度しか、わかっていない。前作に続いて、オーボエではなく、クラリネットが使われている。ちょうど歌劇「フィガロの結婚」の作曲が進められていた時期にあたり、円熟期のモーツァルトらしい緻密な構成をもち、明るく親しげな表情のなかにも微妙な明暗が刻み込まれた充実した音楽となっている。

3楽章構成で、第1楽章アレグロは協奏的ソナタ形式。ロマンティックな第1主題と同じイ長調の第2主題は、ともに第1ヴァイオリンが呈示する。最後のカデンツァは自作のものが楽譜に書き込まれている。これは当時としては異例で、それだけ完璧な作品に仕上げようとしていたと想像される。第2楽章アダージョは、ピアノがアリオーソを奏でるところから始まる。哀調をおびた感情の変化の激しい音楽である。第3楽章アレグロ・アッサイは一転して、華やかなピアノの独奏が快活な気分をかきたてるロンド。第2、第3楽章にピアノのカデンツァを置いていないのも、当時としてはユニークな形態である。

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

白石美雪